

はるな
篠原 春奈さん
(富岡町)

キラリ★ 話題の「ひと」



○プロフィール
佐野女子高等学校、宇都宮大学卒
日本クラフト展、国際漆展、
テーブルウェアフェスティバルにて
入選・受賞

漆の魅力に惹かれて道を 深める漆工芸作家

篠原さんは、大学で美術教育を専攻しました。民間企業の勤務を経て、恩師のすすめで美術、特に漆工芸の道に進み、千葉の願船漆工房で東京芸術大学名誉教授の大西長利さんに師事し、修業を始めます。その頃は漆かぶれに悩まされ、半年ほどは皮膚がぼろぼろになり、かゆみで夜も寝られなかったほどきつかったそうです。また当初は外国産漆を使用していましたが、漆そのものに興味が湧き、国産漆を使いたいとの思いから、岩手県二戸市浄法寺(国産漆生産地)の「日本うるし掻き技術保存会」研修生となります。ここで「漆掻き」の技術も学びました。「漆掻き」とは、漆の木から漆の液を採取する技術です。現在は佐野で制作活動を行い、さらに実家の土地に漆の苗木を育成し、植栽を予定するくらいの打ち込みようです。



▲篠原さんが制作した漆器

篠原さんの作品は、乾漆という技法で、布を漆で貼り重ねて器の本体を作り、さらに漆を塗り重ねて仕上げます。主に日常使う器を制作していますが、今後は家具や建材などのインテリアに漆塗りを取り入れる作品も考慮中で、この冬には展示会に参加の予定です。体調が悪いと、時には漆に負けることもあるそうですが、漆との付き合いを楽しみながら制作に励んでいます。私には未知のところの多い漆工芸の世界ですが、この機会に活動を応援できればと思います。ちなみに小文字の「laccos」は漆ですね。まさに日本の伝統工芸です。

(市民記者 福田満)

市長からの メッセージ

全国に発令されていた緊急事態宣言が5月下旬に全面解除となり、本市でも6月から図書館や公民館、博物館や美術館などの市有施設を段階的に再開しております。スポーツ施設でも感染予防対策が可能な施設から開放を始めており、こちらも今後の状況を確認しながら段階的な運用を行ってまいります。

市内小中学校では、ようやく休校が明け、新学期の授業が始まりました。津布久新教育長のもと、校内での感染症対策の徹底、学びの保障、子どもたちの心のケアを重点課題として、児童生徒の安全を第一とした学校運営を心がけていきたいと思っております。

さて、皆さんへの特別定額給付金ですが、6月15日現在で9割以上の申請を受け付け、順調に振り込みが進んでおります。まだ申請していない方は忘れずに申請をお願いします。

また、外出や営業自粛などにより影響が大きかった市内飲食店への緊急支援策として、商工団体の協力のもとプレミアム付食事券を発行します。7月1日から郵便による応募受付が始まりますので、ぜひご応募を。

緊急事態宣言が解除されましたが、私たちの身の回りからウイルスが消滅したわけではありません。今後もウイルスへの警戒、感染予防を怠らず、新しい生活様式の習慣づけをお願いします。

7月は大雨による土砂崩れや河川の増水による氾濫などが心配されます。昨年の台風被害を踏まえ作成した改正版のハザードマップが完成し、この度、広報と一緒に全戸へ配布しております。現在、国・県に強く要望し、出水期前の河川改修工事が進められておりますが、皆さんもハザードマップを確認の上、避難先や経路の確認など普段からの備えをお願いいたします。

(6月15日 記)

岡部正英

今回の表紙 「夜明けの三義」 令和2年6月9日撮影

暖かい朱色の朝日が、田植え後の水田を照らしました。水田に映り込む逆さ三義は、この時期にしか見ることができない幻想的な風景です。





「日光山上げイチゴ栽培技術 確立の地」記念碑の建立

5月27日(水)、JA佐野愛村支店にて「日光山上げイチゴ栽培技術確立の地」記念碑の落成式が行われました。

イチゴは秋に花芽を付けて冬に休眠し、春になってから葉や花芽が成長し実を付ける性質があります。現在ではビニールハウスでの栽培が行われ、当たり前のように冬に出荷が行われていますが、当時はハウスどころか透明なビニールがありませんでした。なんとかイチゴを正月、クリスマス時期に出荷できないかと研究と努力を重ね、早期出荷ができる方法として山上げイチゴ栽培が確立されました。この技術により、クリスマスケーキを栃木県のイチゴで飾ることができるようになりました。

この偉業は旧愛村農業協同組合参事であった柿沼兵次さんと下彦間苺組合長の稲垣喜平さんを中心にし遂げられました。昭和20年代後半に、静岡県の久能山より石垣栽培を導入し、国産品種第1号のイチゴ「福羽」

産品種第1号のイチゴ「福羽」



▲記念碑の建立を祝う稲垣喜平さんのご息

山上げイチゴ栽培とは
苗を夏に冷涼な高冷地に山上げして、寒さに十分当てることで季節を勘違いさせ、成長を早めることができます。

くば)の栽培に取り組んだことから始まり、日光戦場ヶ原での山上げイチゴ栽培を行い、早期出荷を実現させました。そして、栃木県産イチゴの名称を「日光いちご」とし、東京市場でブランド確立を目指しました。

栃木県はイチゴの生産量・生産額とも日本一を誇るまでに成長し「栃木のイチゴ」として広く知られるようになりましたが、これらの基礎が確立できたのは地域の農業を心底愛したお二方の存在があつたことでもあります。この功績をたたえ、佐野市産イチゴの知名度向上や新規生産者の確保、ブランド化などを願い、JA佐野愛村支店敷地内に記念碑が建立されました。稲垣喜平さんの孫にあたる稲垣実さんは「この地で品種第1号となる福羽を作ったという事実が残って嬉しい。また、今では栃木県のイチゴとして知られているが、日光いちごという名称が歴史に残ることも故人は喜ぶと思う」と話されました。

末代まで使えるじょうぶな道具類を マンゴモンという



昔から使い古してきた家具や農道具であっても、それほどいたんでもなく、また損傷もしないものがあります。農家の人が水田の土を砕(くだ)くために使っている古い「まんが」は、壊(こわ)れないように頑丈(がんじょう)に作られています。このように強くしつかりしたものを、方言でガトーといいます。まんがは馬鋤(まぐわ)が変化したものです。まんがの横木には多くの鉄の歯がついています。これを牛馬にひかせて田畑の土をかきならします。

昭和の初めごろ、農家の人からこんな話も聞かれました。「まんがはガトーにできてツから、そんなにがたが来(来)ンだよねえ」

また、あつらえて作った机や椅子(いす)を見ると「檜(ひのき)でコセタ(作った)机は、見た目にきれいだし、ガトーにコセテ(作って)あるようだね」などといったものです。昭和になると、ガトーということばは自然に消滅し死語になってしまいました。

明治生まれの人は、じょうぶで長持ちするもの(主に家具・道具など)を「末代物(まつだいのもの)」といいました。頑丈に作られた製品は、いつまでも壊(こわ)れないし、長持ちするからです。高価な皮革製品なども末代物といいました。このように長持ちする末代物は、方言でいうことが多く、普通マンゴモンといいました。「その革ガパン(かばん)はマンゴモンだね。見た目にもきれいだし、しつかりしてるしねえ」などといったものです。マンゴとは「きわめて長い時間」という意味の「万劫(まんごう)」が変化したものです。

(市民記者 森下喜一)

